



横浜開港150周年

YOKOHAMA

150th Anniversary of the Opening Port of Yokohama

横浜開港150周年～市政120周年～ 基本ビジョン

2009

since 1859

横浜開港150周年～市政120周年～
基本ビジョン

平成17(2005)年6月2日発行

横浜市横浜プロモーション推進事業本部

商客課市プロモーション課

〒231-0017 横浜市中区港町1-1

電話045-671-2867

FAX045-663-1926

横浜市広報誌発行部誌第170133号

類別-分類目HED20

協力-加藤祐三(横浜市立大学名誉教授、元学長)

写真提供-森日出夫

表紙「横浜山田牧場之全図」(横浜開港資料館蔵)

横浜行電車が8分
ハマの子供用紙が1枚
ヨコハマはG30

2100 〇〇文字以上、印刷費が100%の削減を実現しています。



横浜開港150周年～市政120周年～ 基本ビジョン

C O N T E N T S

02
ごあいさつ

03
横浜開港150年の歴史

07
基本理念

09
取組指針

11
盛り上がり創出に向けて

13
お寄せいただいた市民意見



近代日本開国・横浜開港150周年記念事業ロゴマーク
「風を受けて世界へ開く“帆”」をイメージし図案化しました。

1859年、横浜は前年に締結された日米修好通商条約に基づいて開港されました。

2009年は、開港の年から数えてちょうど150周年にあたります。この間、横浜の象徴である港を主な舞台として、多くの先人たちが活躍し、幅広い分野において数々の功績を残しました。その結果、開港当時、戸数100戸余りであった横浜は、人口356万人を有するわが国第2の都市へと飛躍的に発展しました。

また、開港150周年を迎える2009年は、市政120周年にもあたります。

この記念すべき年を、今日の横浜の繁栄の礎を築いた、港と先人たちの挑戦や苦労などの歴史に想いをはせて、その偉業に感謝するとともに、次世代のはまっ子が夢や希望をひしひしと感ずることのできるまち横浜の創造に向けて大きく踏み出す年にしたいと思っています。

「住みたいまち」として人気があるなど、現在、横浜は魅力あるまちとして、確固たる地位を築いていますが、これは先人たちの不断な努力による賜物です。この地位は今後とも、我々が努力し続けることにより、将来にわたり確保されるものです。

この点を肝に銘じながら、356万市民とともに目標実現に向け、まい進できればと願っています。



横浜市長

中田 宏

横浜開港 150年の 歴史

～横浜発展史～



横浜開港、明治・大正へ

2009（平成21）年に横浜は、1859（安政6）年に横浜が開港してから150周年の年を迎えます。

開港以前の現横浜市域における最大の人口密集地は、東海道の宿場町で、人口5,000人ほどの神奈川宿でした。この神奈川宿の東南約4キロに、後に「横浜市歌」（森鷗外作詞）で「むかし思えばとま屋の煙 ちりりほりりと立てりしところ」とうたわれる、戸数100ほどの半農半漁の寒村、横浜村がありました。

この横浜村で、1854（安政元）年日米親条約が締結され、その4年後の日米修好通商条約の締結によって神奈川に開港場が置かれ、1859（安政6）年7月1日、横浜は開港しました。

新しく生まれた横浜は、開国日本・新生日本の象徴となり、その魅力にひかれ、内外から多くの人々が集まり、質の高い文化交流が生まれました。

来浜外国人は、新生日本（「ヤングジャパン」と呼ばれた。）の魅力と熱気にひかれた文化人や貿易商・技術者が多かったのが特色です。彼らは、日本人が世界最先端の技術や思想を展開したいと思うなら、それに進んで協力したいと考える、ボランティア精神のあふれる人々でした。彼らの多くが、交渉条約を導いた幕府と好奇心あふれる庶民の熱意を感じ取り、横浜にヒト・モノ・カネ、そして情報をもたらしました。

日本全国各地から集まった人々は、内外の先進的な産業や文化を積極的に吸収しようとする「進取の気性」に富み、因習にとらわれず、それぞれの出身地の文化を横浜において融合させようとする「開放性」を作り上げていきました。その良循環が、横浜市民気質となっていったのです。

1889（明治22）年、横浜（人口12万人）は市制を施行し、さらに1909（明治42）年には開港50周年を迎えました。その年には、現在でも多くの市民に親しまれている市章や森鷗外作詞の横浜市歌が発表され、市民の寄付によって開港記念横浜会館（現、横浜市開港記念会館）が建設されました。（完成年度は1917（大正6）年）

明治の末期から大正にかけては、市民生活の面においても、伊勢佐木町の芝居観劇やテニス・野球などのスポーツが盛んに行われ、国際都市らしい市民文化を花咲かせました。また、1910（明治43）年の横浜経済協会の設立により、工業誘致が本格的に始められるなど、多くの地元経済人が横浜を発展させたのもこの時代です。

震災・戦争・復興そして日本第2の都市へ

1923（大正12）年9月1日、関東平野南部を震度6の大地震が襲い、横浜は建物の倒壊や火災で壊滅的な被害を受け、横浜経済は崩壊し、多くの外国商館も東京・大阪などへ移転しました。

しかし、その後市民の努力により復興を遂げ、1930（昭和5）年には市内のがれきの埋め立てでできた山下公園が開園、1935（昭和10）年には、くじらを山下公園前の海に泳がせるなどのイベン

トを中心とした復興記念横浜大博覧会を開催しました。また、横浜港からの輸出品目としては、生糸貿易が中心であったのが、1942（昭和17）年ごろから機械類、金属製品及び鉄鋼などが貿易の主流となって、現在に引き継がれています。

この間、横浜は市域を拡大し続けました。1939（昭和14）年の大規模な合併によって、現在とほぼ同じ市域になり、1942（昭和17）年には人口100万人を突破しました。

また、時代は金融恐慌、失業者の増大、軍需の拡大と続き、第2次世界大戦へと突入しました。そして、1945（昭和20）年5月29日の横浜大空襲までの度重なる空襲によって、被災人口約40万人、少なくとも約1万人が死亡し、横浜の中心部は焼け野原になりました。

戦争終結とともに、横浜の約27%、港湾施設は約90%が連合軍に接収され、横浜の復興は他都市に比べ大幅に遅れました。しかし、焦土と化した横浜から市民は立ち上がり、1949（昭和24）年には、野毛や反町で日本貿易博覧会が開催され、横浜市民を元気づけました。一方、横浜港では海外から多くの客船が訪れたり、ハワイや南米などに新天地を求めた移民船が大さん橋から出航したり、人の交流も盛んになりました。

また、横浜で生まれた美空ひばりが、日本の戦後の歌謡界へ新たな旋風を巻き起こしたり、ジャズやリズム&ブルース等がアメリカから横浜にいち早く入り、横浜発の文化として日本中へ広がっていきました。

1958（昭和33）年、横浜は開港から100年目の年を迎え、開港百年祭が開催されました。これを記念してマリントワーや横浜文化体育館などが建設され、氷川丸が山下公園に係留されました。

日本の高度成長期への突入とともに、横浜の沖への埋め立てが加速化しました。そして昭和40年代の横浜港のコンテナ時代の到来によって、大型港湾化が推進されました。また、1968（昭和43）年には人口200万人に達し、人口の急増に併せて市郊外での団地や宅地造成が行われ、ベッタウンそしてニュータウンとしての新たな横浜の都市像を形成しました。そして、1978（昭和53）年には、人口は272万人に達し、全国第2位の規模をもつ大都市へと成長しました。

平成から現在、356万都市横浜へ

1989（平成元年）、市政100周年・開港130周年記念として横浜博覧会が開催され、約1,333万人を動員しました。また、同じく記念事業として、横浜美術館、横浜アリーナ、横浜ベイブリッジなどが建設されました。

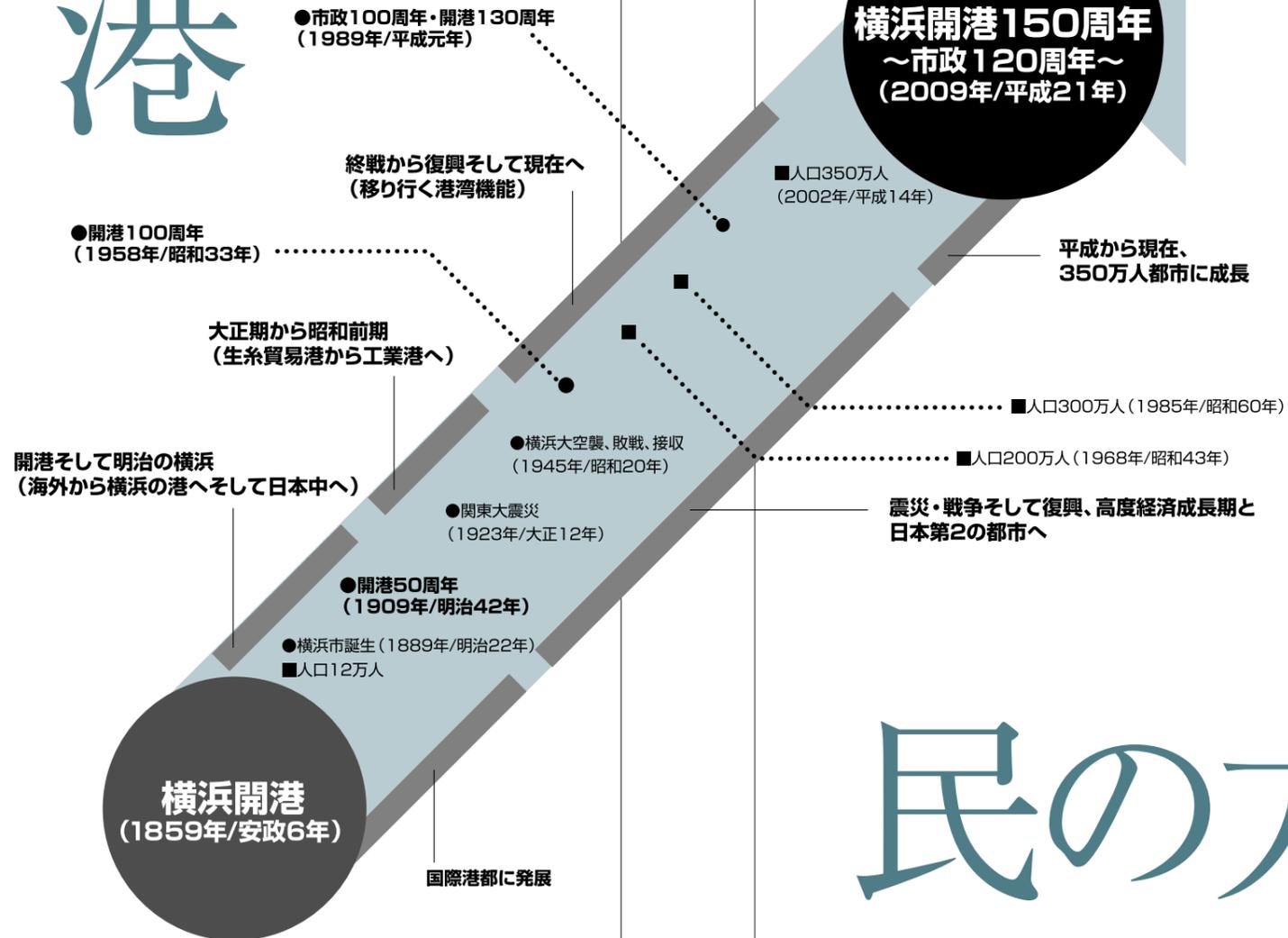
21世紀を迎えて、2002（平成14）年6月、ワールドカップ決勝戦が横浜で開催され、その試合の様子が全世界に発信されました。また、同年10月に人口は350万人を超え、現在も人口は増え続けています。

その後も、2004（平成16）年には待望のみなとみらい線が開業するなど、2009年に向け横浜は発展し続けています。



- 1859(安政6)年 横浜開港、外国貿易始まる。
- 1869(明治2)年 わが国初のビール醸造所できる。鉄橋「吉田橋」できる。電信設置(横浜灯台明～横浜裁判所間)
- 1871(明治4)年 わが国初の新聞創刊される(横浜毎日新聞)。
- 1872(明治5)年 わが国初のガス灯ともる(大江橋～馬車道～本町通間)。わが国初の鉄道(横浜～新橋間)開通する。
- 1878(明治11)年 横浜商法学校(現在、市立横浜商業高校-Y校)開校
- 1887(明治20)年 横浜～国府津間の鉄道開通する。近代水道(横浜水道)できる。
- 1889(明治22)年 市制施行、初代市庁舎開庁
- 1890(明治23)年 電灯ともる。公衆電話始まる(横浜～東京間)。水道市営化
- 1891(明治24)年 十全病院(後の市大病院)市営化
- 1892(明治25)年 ガス市営化
- 1899(明治32)年 外国人居留地なくなる。
- 1904(明治37)年 横浜電鉄(後の市電)、神奈川～大江橋間開通。
- 1906(明治39)年 三溪園外苑公開
- 1909(明治42)年 開港50年記念祭行われる。市歌、市章できる。
- 1917(大正6)年 開港記念横浜会館開館
- 1923(大正12)年 関東大震災起こる。(被害 全焼62,608戸、全壊9,800戸、死者21,384人)
- 1928(昭和3)年 市バス開業
- 1930(昭和5)年 山下公園開園
- 1935(昭和10)年 復興記念横浜大博覧会開催(山下公園)
- 1944(昭和19)年 学童集団疎開始まる。ガス民営化(横浜ガス株式会社)
- 1945(昭和20)年 横浜大空襲、市街地の42%、人口の44%被害(98,361戸焼失)、終戦、市中心部・港湾など接收(人口624,994人)
- 1949(昭和24)年 日本貿易博覧会開催(野毛、反町)
- 1951(昭和26)年 人口100万人突破する。野毛山動物園開園
- 1952(昭和27)年 大さん橋の接收が解除される。
- 1953(昭和28)年 第1回みなと祭開催。国際仮装行列行われる。
- 1954(昭和29)年 三溪園外苑の戦災復旧工事が終了し、公開を始める。
- 1955(昭和30)年 第10回国体開催(三ツ沢競技場)
- 1956(昭和31)年 政令指定都市となる。
- 1957(昭和32)年 サンディエゴ市と姉妹都市提携
- 1958(昭和33)年 開港100年記念祭開催
- 1959(昭和34)年 リヨン市と姉妹都市提携
- 1961(昭和36)年 マリニタワー開業。氷川丸一般公開
- 1962(昭和37)年 港の見える丘公園開園。横浜文化体育館開館
- 1965(昭和40)年 ボンベイ市、オデッサ市、バンクーバー市、マニラ市と姉妹都市提携
- 1968(昭和43)年 人口200万人突破する。
- 1971(昭和46)年 市民の木制定(ツバキ、シイ、サザンカ、ケヤキ、サンゴジュ、イチヨウ)

横浜港



チャンス
あふれるまち
横浜

民の力

- 1972(昭和47)年 市営地下鉄(伊勢佐木長者町～上大岡間)開通する。市電、トロリーバス全廃される。
- 1973(昭和48)年 上海市と友好都市提携、「横浜市基本構想」に基づく『横浜市総合計画・1985』
- 1976(昭和51)年 市営地下鉄(横浜～上永谷間)延伸開通する。
- 1977(昭和52)年 コンスタンツァ市と姉妹都市提携
- 1978(昭和53)年 人口が大阪を抜き全国第2位となる(人口2,714,966人)。横浜スタジアムできる。
- 1979(昭和54)年 開港120年記念、市制90周年行事行われる。
- 1980(昭和55)年 オークランド港と姉妹港提携
- 1981(昭和56)年 バンクーバー港と姉妹港提携、『よこはま21世紀プラン』策定、横浜マラソン始まる。
- 1983(昭和58)年 みなとみらい21事業着工、上海港と友好港提携
- 1984(昭和59)年 横浜こども科学館開館
- 1985(昭和60)年 人口300万人突破する。市営地下鉄(新横浜～舞岡間)延伸開通する。帆船『日本丸』一般公開
- 1986(昭和61)年 メルボルン港と貿易協力港提携、横浜人形の家開館
- 1987(昭和62)年 国連から『ピースメッセンジャー』に認定される。市営地下鉄、戸塚まで延伸開通する。近代水道100周年、水道記念館開館
- 1988(昭和63)年 市政100周年・開港130周年記念事業地域イベント開催
- 1989(平成元年)年 横浜美術館、横浜アリーナ開館、横浜博覧会開催、市政100周年・開港130周年記念式典開催、「金沢シーサイドライン」開通、横浜ベイブリッジ開通、市の花制定(バラ)、『よこはま21世紀プラン』の新たな計画発表
- 1991(平成3)年 横浜国際平和会議場オープン
- 1993(平成5)年 新総合計画『ゆめはま2010プラン(長期ビジョン)』を策定する。市営地下鉄(新横浜～あざみ野間)延長される。ランドマークタワー完成、開業する。横浜八景島オープン
- 1994(平成6)年 鶴見つばさ橋開通する。
- 1995(平成7)年 横浜市歴史博物館開館
- 1996(平成8)年 横浜能楽堂開館
- 1998(平成10)年 横浜国際総合競技場オープン
- 1999(平成11)年 市営地下鉄(戸塚～湘南台)が延長される。
- 2000(平成12)年 横浜情報文化センター開館
- 2002(平成14)年 FIFAワールドカップサッカー決勝戦他開催される(日韓共催)。横浜市人口350万人超える。
- 2003(平成15)年 横浜都市発展記念館・横浜ユーラシア文化館開館
- みなとみらい線開通(横浜～元町・中華)

基本理念

1859（安政6年）の開港から150年近くが経過しました。この間、戸数100戸余りの半農半漁の村であった横浜は、飛躍的に発展し、現在、18区、約356万人の人口を有する、我が国第2の大都市になりました。

開港によって、世界のヒノキ舞台に登場した横浜には、国内外から多くの人々が夢と希望をもって集まりました。港を舞台に人的・物的交流が盛んになり、ヒト・モノ・カネに加えて、最新の技術や情報が集まり、日本の近代国家の窓口としての役割を果たしました。鉄道、新聞、ホテル、パン、アイスクリームなど現在の日常生活に溶け込んでいる数多くの生活必需品が、横浜からはじまり日本中へ広がっていききました。

当時の横浜には、進取性・開放性が高く、因習にとらわれない気風に富み、新しいもの、困難なものに挑戦する気質にあふれていました。こうした先人たちの精神を「横浜ならではのフロンティア・スピリッツ」として高く評価したいと考えます。

大正・昭和と時代が変遷していく中、横浜は関東大震災、第2次世界大戦、市中心部の接収と多くの苦難を乗り越えてきました。この間、海外との人の往来の窓口が空港に移るなど、港の機能が変化する中、横浜の持っていた優位性にもかげりがみえてきました。

そして現代。港の機能が物流中心になる一方、多くの都市部の自治体と同様、急速な少子・高齢化社会の進展や市内経済の停滞化、都市間競争の激化などといった問題に直面しています。

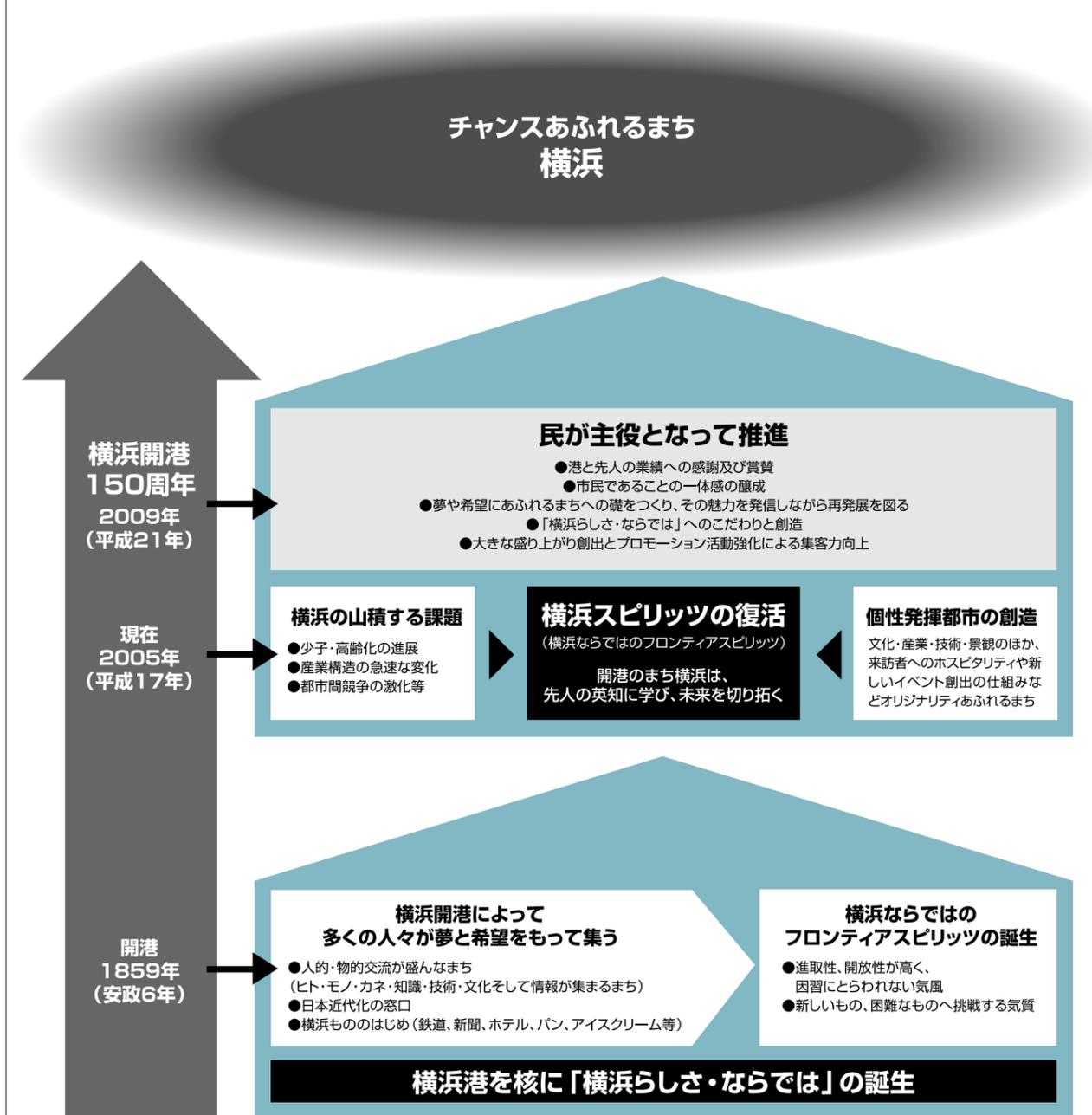
こうした時代に、横浜は4年後の2009年に、開港150周年（市政120周年）を迎えます。これを契機に私たちは、港や先人たちが果たしてきた役割について改めて評価し直すとともに、「横浜ならではのフロンティア・スピリッツ」など、これまで培ってきた独創性や進取性といった、横浜の誇れるものを、改めて今日の横浜の様々な面に活かすことにより、次世代の横浜が、夢や希望を持てる、そしてチャンスあふれるまちであるための礎を築くことが、とても重要だと考えます。

また、この節目となる記念すべき年を、356万市民全体で盛大に祝福するとともに、これに共感する多くの市外の人々にも一緒に祝っていただきたいと思います。

このような観点から、開港150周年を、5つの契機としてとらえ、これらの実現をとおして、「チャンスあふれるまち横浜」を創造することをめざします。

【5つの契機（目標）】

- 港と先人の業績への感謝及び賞賛の契機
- 150周年という記念すべき年を、市民全体で盛り上げ、祝うことをとおして、市民であることの一体感を醸成する契機
- 次世代の横浜が夢や希望にあふれるまちであるための礎をつくり、その魅力をグローバルに強く発信しながら、再発展を図る契機
- これまで横浜に培われてきた、新しいものに挑戦し、様々な独創性に富んだものを生んできた気風・気質を継承、発展させる契機
＝「横浜らしさ・ならではの」へのこだわりと創造の契機
- 幅広い大きな盛り上がりの創出と内外へのプロモーション活動強化によって、集客力を高める絶好の契機



取組指針

開港150周年は、横浜の歴史において重要な節目となる年です。

この記念すべき年を、

- 開港150周年記念式典、お祭りやパレードなど各種記念イベント
- 理念に賛同して自主的に企画・実施される、市民活動団体等や企業が主催する様々な事業
- 港やまちづくり、歴史など広範な分野にわたる横浜市に関連戦略事業などからなる記念事業が、まぶしい光が放たれるように展開し、内外から「横浜らしい」、「横浜ならではの」と評されるようになる、2009年にしていきたいとします。

そのための準備や仕組みづくりに早速、着手しなければならないのは言うまでもないことですが、取組みを進めるうえでの基本となる考え方は「民が主役の開港150周年記念事業」です。

記念イベントを例に挙げれば、官主導ではなく、民の意欲や企画力、実行力などが思う存分に発揮されてこそ、従来の発想にとらわれることのない、多くの人々の好奇心をくすぐり、参画意欲をかき立てるような、ユニークなイベントが創作される。こうしたイベントが横浜市全域で無数のさざ波のように生まれ、それが大きなうねりとなって、横浜から全国に、さらに海外に広がって多くの人をひきつける。そんな状況が創り出されていくことを期待しています。そのために横浜市は、民が主役となって活躍できる、飛び入り参加自由な、イベントの舞台づくりを進めます。

また、横浜で活動する、市民活動団体や企業などが今回の理念に賛同し、開港150周年に併せて、次世代の横浜発展に貢献できる活動を始めようといった、横浜らしい自主事業の企画立案・実施という方法による参加も積極的に歓迎します。

港やまちづくり、歴史など、舞台づくりに必要なもの、開港150周年にふさわしいもの。こうした横浜市の事業も「関連戦略事業」として記念事業に位置付けていきます。

重要なことは、「民が主役の開港150周年記念事業」という考えのもとに市民、企業、行政の3者が力を合わせるとともに、互いに意欲や想像力を刺激し合いながら、それぞれが独創性やチャレンジ精神を大いに発揮して、5つの契機（目標）の実現を図る。そして、次世代の横浜が夢や希望を大いに感じることで、「チャンスあふれるまち横浜」の創造をめざすことにある、と考えています。

開港150周年、人になぞらえてみれば、150回目の誕生日に相当します。誕生日、特に節目となる誕生日を世の多くの人々が盛大に祝うように、開港によって、今日の発展の礎が築かれた横浜の、この記念すべき年を、市内全域がパーティ会場になって、多くの人々とわいわい、がやがや盛り上がる、素晴らしい誕生日パーティにしたと思っています。

こうした盛り上がりをおして、横浜ならではの魅力をさらに高め、「横浜が好き」、「横浜に住んでいてよかった」と多くの市民が喜びや誇りを感じることができるとともに、横浜を訪れてみたいという市外の横浜ファンをふやす。そして人々の記憶に永く残る、そんな開港150周年記念事業にしていきたいと考えています。

開港150周年記念事業イメージ像

(1) 記念イベント

- ・来場者が港や船に親しめるイベント
- ・横浜発祥の出来事・モノにまつわるイベント
- ・日本初・世界初など国内外からの注目度が高いイベント
- ・来場者が自由に参加して楽しむことができるイベント

(2) 民の自主企画事業

- ・横浜の開港・歴史などをテーマにした絵画・造形品・映画・商品等の製作
- ・記念イベント等を支えるボランティア団体の結成
- ・横浜の歴史や魅力に関する勉強会の開催や書籍発行
- ・次世代の横浜発展につながるような、環境・福祉・青少年・地域活性化などの市民活動や企業活動

(3) 関連戦略事業（横浜市事業）

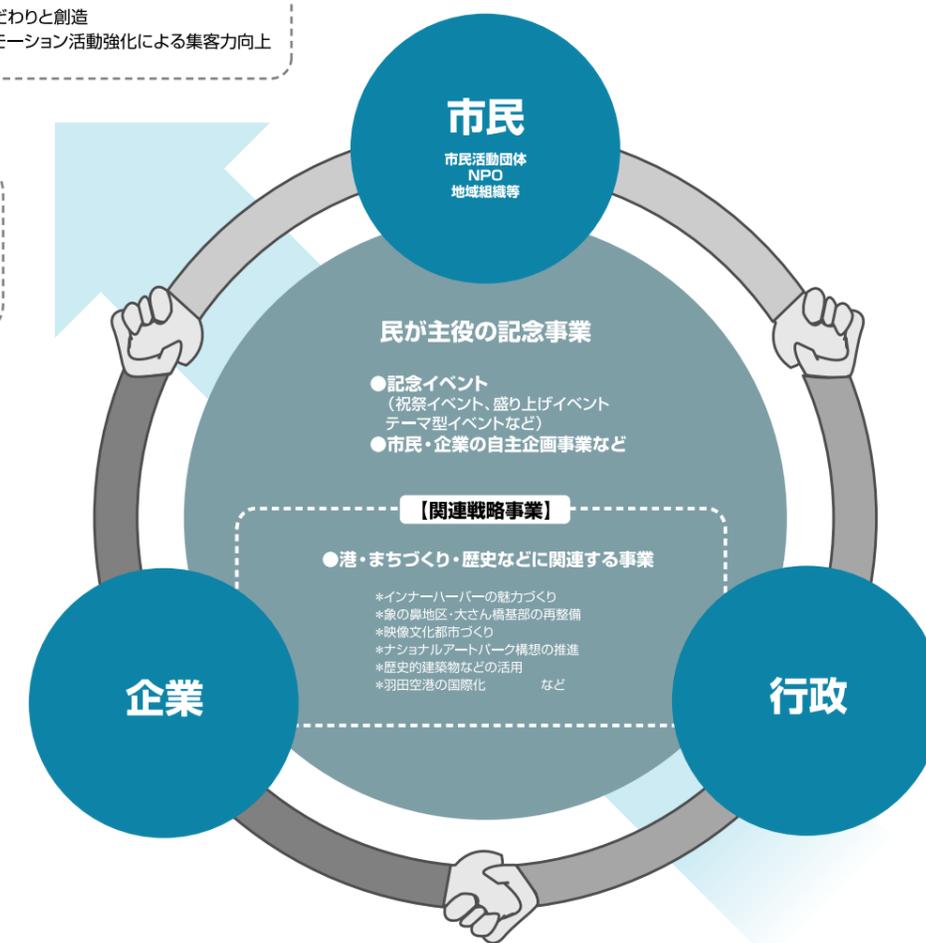
- ・インナーハーバーの魅力づくり
- ・象の鼻地区・大さん橋基部の再整備
- ・映像文化都市づくり
- ・ナショナルアートパーク構想の推進
- ・歴史的建築物などの活用
- ・羽田空港の国際化 など

【5つの契機（目標）】

- 港と先人の業績への感謝及び賞賛
- 市民であることの一体感の醸成
- 夢や希望にあふれるまちへの礎をつくり、その魅力を発信しながら再発展を図る
- 「横浜らしさ・ならではの」へのこだわりと創造
- 大きな盛り上がりの創出とプロモーション活動強化による集客力向上

【期待される効果】

- 市民満足度の向上
- さらなる経済の活性化



盛り上がり 創出に 向けて

2009年は横浜全体で大きく盛り上がり、そのエネルギーを国内外に強く発信して「はまっ子」のパワーを示す絶好の機会だと考えています。

多くの人々に関心や興味を持ってもらうために、ロゴマーク（みなさんご存知ですか。）などを活用しながら、様々な広報ツールやメディアを利用したPR活動、話題性のあるイベントの開催支援など、今後、プロモーション活動を強化していきます。

また、市民（民）が主役となって記念イベントが繰り上げられるように、「イベント創造プラットフォーム（仮称）」という活躍の舞台を創設していきます。

具体的には、「開港150周年を自分たちが企画したイベントで祝いたい」、「開港150周年の盛り上げを応援したい」などの意欲を持った市民、市民活動団体、企業などが、それぞれアイデアや実行力、資金力などを活かしながら自由に登場し、主役となってパフォーマンスすることができる、制作者にもなることができる、また、観客としても楽しむことができる、そんな舞台づくりをすすめます。

みなさんの個性によって創り出された、「横浜らしい」、「横浜ならではの」色彩豊かな記念イベントが横浜のあちこちで展開し、それを楽しむ人たちで、横浜が笑顔や元気でいっぱいになる。こうした元気なエネルギーを横浜から全国に向け発信し、多くの人を元気にする。そんな広がりを生むイベントを展開してみませんか。

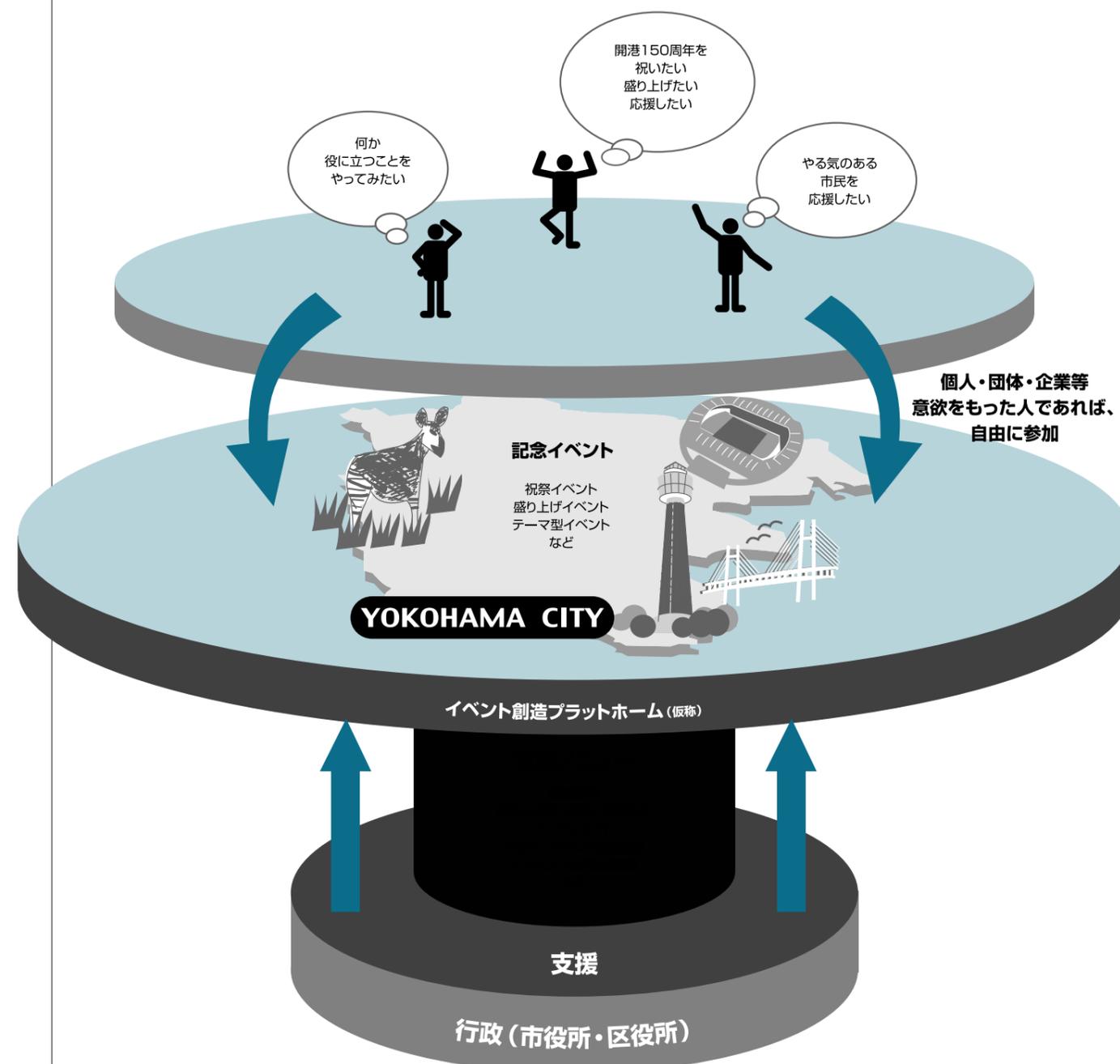
横浜市は、会場となる公園や道路の利用など様々な規制緩和やコーディネート、ノウハウ支援などに市役所全体で取り組み、この大舞台づくりを進めていきます。

「記念イベント」の会場は港周辺だけではなくありません。横浜市内全域が「開港150周年」のキャンパスです。そのキャンパスがより輝きを増すよう、市内の各地域で、自由に独創的なアイデアによるイベントを繰り上げ、横浜全域を彩ってみてください。

このような記念イベントの展開とともに、横浜を代表するイベントとして市民に親しまれている「ザ・よこはまパレード」や「横浜開港祭」などの多くの魅力的なイベントとも一緒になって、横浜発の大きな盛り上げのウェーブをつくっていきたくと思っています。

そして、この盛り上がりの中、日ごろ、港に親しむ機会の少ない市民のみなさんにも、港に接して、横浜の歴史に想いをはせる、ぜひ、そんな機会であって欲しいと願っています。

最後になりますが、「チャンスあふれるまち横浜」の実現に向け、開港150周年という横浜歴史の節目の年が大きな推進力となったと、後世から評価されるように取り組んでいきます。



お寄せ いただいた 市民意見

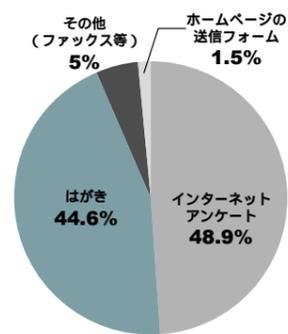
この「横浜開港150周年～市政120周年～基本ビジョン」（素案）は、平成17年1月6日に発表し、平成17年1月18日から3月18日までの60日間、市民の皆様からこのビジョンに対する意見や、イベントなど記念事業に対するアイデアを募集いたしました。その結果、多くの方からこのビジョンに対するご意見をいただきました。ありがとうございました。ここにその意見の一部をご紹介します。

また、記念事業等のアイデアについては、今後策定を予定している「横浜開港150周年記念事業基本計画（仮称）」の検討の中に反映させていきます。

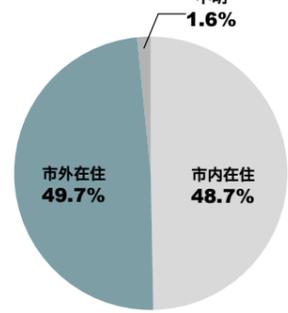
応募総数 8,155人 意見・アイデア総数 14,493件
 募集方法 ●基本ビジョンリーフレット添付のはがき
 ●横浜開港150周年ホームページ専用送信フォーム
 ●インターネットアンケート
 ●郵送・ファックス・Eメール 等



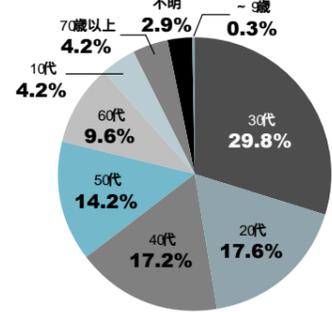
◎意見・アイデア提出方法



◎市内・市外在住割合



◎世代別割合



ビジョン策定に対して寄せられた主な市民意見

◎基本理念（開港150周年を5つの契機としてとらえ、これらの実現をとおして「チャンスあふれるまち横浜」を創造することをめざします。）に対する主な意見例

- ・開港より発展してきた横浜の歴史を感じられるイベントにしてほしい。震災や戦争の挫折を乗り越えてきた横浜のたくましさを、市民の方々にアピールしてほしい。
- ・開港150周年は大きな節目である。「横浜ならではのフロンティアスピリッツ」復活はよい視点だと思う。
- ・「市民の一体感」といってもいろいろある。横浜市民は「一緒」というのは好きではない。様々なベクトルを向きながら「でも、横浜市民」というような「一体感」でなければならないと思う。
- ・「横浜に住んでいる」「横浜で働いている」という誇りを持つような、市民が一体となれる事業であるとよい。
- ・港から遠いところに住んでいると、港町という意識はほとんどない。横浜全域全体で参加できて一体感がもてる事業を行ってほしい。
- ・開港150周年を大切に考えているのは感じるが、表現が硬く読みづらい。市民や企業が中心となって行うのであれば、「5つの契機」ももっと柔らかな表現でなければならない。
- ・本事業を契機として、市民の一体感を醸成してほしい。また、イベント開催や都市整備を通じて市民の関心を集め、大きな盛り上がりを出し、集客力の向上を推進してほしい。
- ・「横浜らしさ」を全面に打ち出した市民参加型の記念事業を期待する。

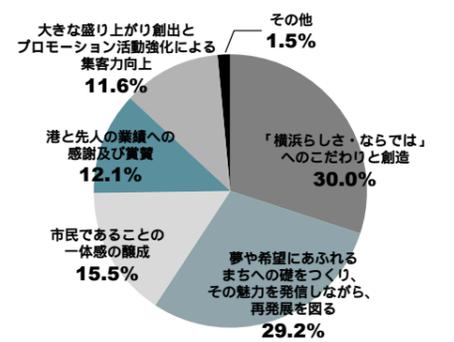
◎取組指針（「民が主役の開港150周年記念事業」という考えのもとに、市民・企業・行政の三者が力を合わせてお互いに意欲や想像力を刺激しあいながら、5つの契機の実現を図ります。）に対する主な意見例

- ・「民が主役」なのはわかるが、行政が何をどこまでやるのか明確にしてほしい。
- ・行政がうまくサポートして、民の力を結集してほしい。
- ・世界に向けた横浜開港の意識を見直し、その価値を自覚し、さらなる発展を促進する。市民全体で盛り上げるよう、まず行政がやる気を見せて率先実行する。市民が主役ではない、協働である。市民が理解してはじめて記念事業は成功すると思う。
- ・行政主体ではなく、市民の声を反映し、市民レベルのものを創ってほしい。

◎その他ビジョンに対する主な意見例

- ・記念事業が単なるイベントで終わることなく、後世に残せて、さらに未来への道標になるものにしてほしい。
- ・具体性にかけるので、理解しづらい。
- ・開港150周年事業なのか市政120周年事業なのか、両者を混合しないように事業のコンセプトを明確にし、「開港」に重点を置くとしたらあまり最近の市政アピールに走ることなく、港町として本市の150周年を振り返り、未来につなげるものにしてほしい。
- ・国際都市としての、横浜の魅力をアピールしてほしい。横浜の経済を活性化してほしい。
- ・横浜のさらなる発展のための起爆剤となれば最高。

◎ビジョンの基本理念にある5つの契機のうち、どれに力を入れるべきだと思いますか？



◎開港150周年記念事業には、どのようなものがふさわしいと思いますか？

